

「ひとりひとりの目覚めから」

エリーといさどんとの対談シリーズも第 5 弾を迎えました。前回の「ホリスティックな捉え方」を受けて、「では具体的にどう行動していけばいいのか」というのが今回の質問です。

エリー：

「社会を変革する手だて」と「心を磨く」というふたつのベクトルがあると思うのですが、それは個人の中で統合して考えられ、実践力として導き出すことが出来るのでしょうか？もしそうではないとしたならば、社会の変革と心を磨くということは別々の人がそれぞれの役割としてあるのでしょうか？

この質問は4月の時点で考えた質問ですが、昨日もう一度この質問について考えてみた時に、これは当然のことなのですが、社会を変革するためにはどのような社会を理想として描くのかを考える必要があります。そういう理想を実現するために、例えば政治を改革するという方法を考えると同時に、政治を支えるひとりひとりが成長していかないといけないのだと思いました。そうすると、社会を変革する道筋に、ひとりひとりの人間がそういった社会を担うに足るものとして成長する必要があるわけですから、社会を変革する手だてと心を磨くというのは車の両輪のようなものです。

4月の時点では、どちらかと言うとそれを別々のものとして捉え、それらは別々の人の役割であると考えていました。しかし、個人が理想を持ち実践して成長しながら、そういう社会変革を目指していくというふうに、統合されるものではないかと今は考えています。社会変革のイデオロギーみたいなものが先行する改革にはやはり限界があるのではないかと、ということ昨日考えていました。ただ、これを前提とした上で、個々人の個性や特性がありますので、役割としては政治的な役割を主に担う人と、生活を通して実践しながらこういう共同体を維持していくことが主眼の人とが連携しつつ、分業していくということが最終的にあるのだろうかと考えています。

今後、若い人たちが育っていく中で、共同体の役割というものが社会とのつながりの中でどのように果たされていくのかと考えた時に、今の質問にぜひ答えていただきたいと思っています。

いさどん：

人間の歴史イコール地球の歴史だと捉えておりますが、最近、地球がどのように創世されてきたのかを特集するNHKの番組を観ました。色々な説がありますが、地球に生命が誕生し滅亡し、誕生し滅亡し、その都度同じことを繰り返してきたのではなく、負荷がかかりながら新たなものを加えて、人類の誕生につながってきたようです。地球規模の変革、例えば隕石が落ちてくるような地球規模の破壊が過去に起こり、その連続で繰り返し破壊を続けなが

ら常に進化してきた地球を想う時に、私たちひとりひとりも日常の中で出会う困難や出来事を通じて変化し続けながら成長しているという同じような形態が観られると思うのです。人類をひとつの人格としたならば、人類もそのように変化を余儀なくされてここまで歩んできたと捉えることが出来るのです。

今、20世紀が終わって21世紀が始まったところです。私の感覚的な捉え方からすると、今は21世紀に入ってはいますが、20世紀から21世紀へ人類の価値観がバトンタッチされる狭間にあると思います。過去にはハルマゲドンのような世紀末説が騒がれたこともありましたが、私自身もそういうことを想いながら時代を眺めてきました。そして今、新しい価値観は人間にとってじわじわと生活の中に落とされて、自然に移行していくような形態を取られるのだらうと思います。20世紀から21世紀への変革というのは、100年単位の変革ではなくて1000年単位の変革と捉えています。人類の歴史の中でも今私たちが迎えている価値観の変革は、大変大きな変化だらうと思うのです。それが今、人類が地球上で迎えている社会自体が直面していることです。実際、沢山の人が新しいライフスタイルを望むようになっていきますし、今までのような20世紀型の価値観は廃れてきています。

20世紀型の価値観では、物やお金を得ること、そして競争して勝つことが優先されてきました。そして、その勝ち得た人にとってはそれが喜びとなるのですが、それを守っていくことによって重荷を抱えるようになり、それはそれで自身に負荷をかけることとなります。その結果、勝者にも敗者にも優しくない社会を創ってきたということだと思うのです。そこでは明快に貧富の差が生まれていますし、人類の尊厳を疑いたくなるような現状があるのです。私はこの20世紀の中ほどに生まれて21世紀を夢見た時に、どれほどの理想の世界がそこにあるのだらうと子どもの頃は思ったわけです。テクノロジーの面では非常に進化し、想像を超えた世界が展開されているわりには、個々の人間の質ということからしたらあまり成長してこなかったのではないのでしょうか。それは、この20世紀という時代が個人というものに焦点が当てられていたからです。個人の意識、自我を目覚めさせ、自我の目的を達成することによって進化すること。そして、人間の能力の可能性を人々が知るための期間だったということです。生命科学から観てもそうですが、人間はこの自然の仕組み、神をも分析し捉えることが出来るのではないかといったところまで歩みを進めてきたわけです。

この世界が人類を誕生させるために、まず宇宙が創られ、銀河が出来、太陽系が創られ、次に地球が創造されて、生命がそこに生まれ、人類に到達してここまで来ているという長い歴史を観た時に、私たちがそれをどのように捉え、次にどのようにつなげていくのかという意識を育てていく時代が来ているのだと思います。個人の心を磨くということは、個人そのものの精神性、霊性を高めていき、個人の悟りを開いていくということですが、例えば里芋で言うと、里芋を洗う器械というものがあります。川の中に支柱を立てて、竹で作ったかごの中に里芋を入れ、そのかごの下の方だけに川の水がかかるように置いてやると、そのかごが川の流れによって水車のようにゴロゴロまわるのです。そうすると、里芋同士がお互いをぶ

つけ合いながら丸くなり、綺麗になっていくのです。そして、人間が食べられるように仕上がっていきます。だから、人間が里芋をかごに入れてそこにセットしておけば、その芋は30分もすればそのまま煮て食べられるような状態になっています。それこそ人間が皮をむいて綺麗にしたのとは全く違う、大変美しいものとなって仕上がってくるわけです。

それと同じように、人間の歴史の中にも川の流れのようなものがあり、その川の水が今の歴史だと思うのです。私たちが里芋であり、かごの中に入ってお互いをぶつけ合い、自分たちを変化させながらその時代のニーズに添えていく。里芋を川の中に置くということは、綺麗にして食べられる状態にし、調理して食べるという最終的な目的があるわけです。それは意志があってなっていくことでもあり、時代がそれを導いているということですから、個人の意志をもっと大きな意志に沿わせてそれとしっかりコラボしながらその目的が達成されていく時代だろうと思うのです。

そうすると、個人が心を磨くということは個人の目的にだけあるのではなく、それは個人が優れた人になって社会が一人分綺麗になるというわけです。それが連鎖していくと、個人が心を磨くということは同時に社会を磨くということになって、これは全く同じ目的のもとにあるものです。ただ、今までは個人を磨くという概念が重要視されてこなかったわけです。今までは人々が個人の目的を叶えることを大切にしてきた時代でした。それが今変化しようとしているのは、個人の意識は社会を構成するものであり、個人の意識の集合が社会の意識だということです。つまり、ひとり人間を個人とするのですが、それは社会の中の多様性のひとつであり、全体を構成するひとつだと捉えた時に、個人の行ないが社会を創っているという捉え方です。これは全く難しい話ではありませんが、とかく20世紀型の生き方に慣れてきた人たちは、自らの願望を叶えることにフォーカスして生きてきたわけですから、そのような概念がなかったのです。

ここの生き方や仕組み、精神性を学びに来る沢山の人たちに私が伝えているのは、自我から観える個人の生き方や社会のあり方と、地球がどういう意志を持って私たちに何を望んでいるのかという地球の側の視点を同時に成立させるようなものの観方をすることがこれから求められているということです。今までの20世紀型の人間の価値の求め方というのは、この世界が無限に人間の欲望を叶えてくれるキャパを持っていると考えていたわけです。キャパがあるかないかということすら考えていないような時代だったのですが、今、地球の側から地球というものには限りがあると示されているのだと思います。キャパがあるということは、そのキャパがある分だけわがままをしてもいいと言うわけではなくて、地球の側の視点に立って物事の判断に活かしていくということです。人類がもっと進化していけば、地球の側から宇宙の側にまで視点がシフトしていくのですが、とりあえず今は地球の側の仕組みを知り、持続可能なようにそのメカニズムを取り入れていく必要があるのです。人間たちの存在というのは地球の存在に連動し続けることが大切なのだ、ということ人間たちは考えないといけないのです。自分の欲望を叶えるということは、個人の目的であると同時に地球の

成り立ちを刻んでいることにもなります。ですから、地球の目的というものが私たちの存在と同時にある、ということを経験者が認識する時代に私たちは立っているということです。

それが成し遂げられた時にどういう社会が訪れるのか、ということを経験者に言えば、宮沢賢治の世界です。つまり、個人の幸せは全体の世界によってもたらされるべきであって、個人の中から出てくるエゴ的な理想や喜びによって個人の幸せが成立するのではないということです。これは当たり前のことですが、個人が個人のエゴ的な幸せを追求していくと世の中はエゴだらけになるわけですから、エゴとエゴが対立して今の社会のような世界が出来るといえることです。これはわかりきった話で、広い視点で自分を観る視点と自分から全体を観る視点の両方を人間が持っていたら、こうした矛盾にたちどころに気づくものです。しかし、残念ながら今までは自分の願望を叶えるというエゴ的な視点を持って、人間はあの芋洗い器の中にある芋のような進化をしてきたわけですが、実は芋洗い器には芋だけの目的ではなくて、かごを作って水の中にそれを仕掛け、芋を洗って綺麗にして、それを食べるという大きな目的があるのです。芋にはそれを知って、自らを磨いて食べられ、有効に活かしていくという意識が必要だということです。

理想の世界というのは、優れた人だけが創るものではないと思うのです。それは自然を観たらわかりますが、自然界には独立したものが無数にあります。そこではひとつの地球、ひとつの生態系というワンネスの世界を創っているわけですが、そうやって、全宇宙がお互いに関係性を保ちながら、個々には多様性の中で独立した存在をしっかりと表現しているのです。そうすると、「理想というのはこういうもの」というイメージがあってもいいのですが、それは結果として現れてくるものだと思うのです。「理想を獲得しよう」とか、「こういうものだからみんなで創り上げよう」ということではなくて、ただただ育まれ育っていく中で自然に表現されるものです。私たちが素晴らしい朝日や夕日と自然のコラボを観て感動するように、時空とともに粛々と創造され私たちに示されるようなものだと思うのです。これはとことんいただくものであり、そのために私たちは何をすべきかといったら、粛々とこの世界の不思議、奇跡を学び取り入れて自分磨きをするということです。ひとりひとりが生き方を振り返り、気づきながら目覚め創っていくのが理想世界なのではないでしょうか。

私たちが宇宙船に乗って地球の外に出て地球を観たら、それこそ月のように地球が昇っていくのを観ることが出来るでしょう。「日の出」や「月の出」のように「地球の出」といえることです。地球の出を観るようにして、理想世界というものはもたらされるものなのだろうと思っています。そのためには、過去の共産主義にあった革命で制度を変えたり、英雄が現れ民衆を決起させるのではなく、ひとりひとりの心の中に目覚めが生まれ、ひとりひとりの意識変革によって地域変革、社会変革、政治が変わって世界が変わっていくということなのだろうと思っています。そして、それはすでに進行中になっています。木の花ファミリーというものには見本がなかったのですが、私たちは今の世の中の矛盾をどこかで痛みとして感じながら、みんなに優しい世界を創るにはどうしたらいいのかということを経験者に取り組ん

できた結果、ここがあるので。その過程にはまわりから理解されなかったり色々なことに悩むこともありました。大切を感じる心があったからこそその抵抗を超え、その都度ふさわしい人たちが現れて私たちの追い風になってくれました。そして、その人たちはともにその川を流れる水になってくれて、今、大きな流れが出来てきたわけです。

最近感じるのは、若い世代の人たちは今までのような社会の価値観の上で生きることには抵抗してきているということです。「一般社会に出ないで新たなライフスタイルを求める」とか、「自然の中に望んで生きていく」とか、中には「都会で新しい人々の生き方を追求する」という人も現れるようになり、大学がそういったニーズを取り入れるようになりました。それは若い世代の人たちがそういったニーズを持っているから大学が応えるようになったのですし、それをリードする先生たちも遅ればせながら意識を変革するようになりました。面白いのは、医師や弁護士、会社の経営者たちといった社会で成功してきた 20 世紀型の寵児のような人たちが、「今のままで人生を終わってはいけない」と考えるようになってきたのです。これは誰も導いていないことです。そのような指導書はどこにもないので。ひとりひとりが魂の中からそういうものを感じて表現しようとしています。

自然界では、植物でも動物でもバクテリアですら、個々に自身をしっかりと表現しながら、利他という仕組みの中で「自然」という見事な芸術を表現しています。生命の四季の表現でもあるように、人間もひとりひとりの存在の中に音符のようなものを持ち、それがつながって、人間の創る世界が交響曲のように表現されていくようなものだろうと思います。そのためにはひとりひとりが成長することが必要です。そして、ある一定の数の人たちがこの人たちのように心磨きをしていくと、100 匹の猿現象が起きるだろうと思うのです。そうすると、その現象をもたらす追い風が吹き出します。今までの価値観では、「こうしなければいけない、自分が納得し獲得しなければいけない」という固いイメージがあったのですが、これからの時代はそういった心配はしなくていいのです。この新しい時代のうねりに身を任せ、委ねればいいのです。委ねれば、自分を越えた大きなものから生まれてくるハーモニーがひとりひとりの中から湧き出てきます。個人が認められながらそこには多様性があり、ひとりひとりの中から湧き出てくるものは全体性を意識し個人の人生を表現していく、という世界が生まれてくるのです。

これはまさしく自然の姿そのものなのですが、そういう上にこの社会が出来てくると、私たちはよく、「政治が良くない」とか表現しますが、政治というものは政治家が創っている世界ではありません。その社会を構成する人々によって創られた場所なのです。つまり、主役はいつも民衆なのです。ですから、人々の意識が変わることによって、自動的に選ばれる政治家も変わりますし、その選ばれた人は私たちの代表者であるわけです。私たちは今まで自分から区切って遠くから政治を観てきましたから、政治が別世界にあったのです。しかし、これからはイデオロギーが先あってその中に人間が組み込まれてきた時代から、ひとりひとりの目覚めが世界を創っていく時代になるのだろうと思います。そのことによって、ひと

りひとりりが本当に主演の世界が出来てきます。それこそが理想の世界なのです。ですから、私たちが理想世界を建設するためには人々の意識変革が大きな意味を持ってきます。私たちの存在は地球生命である人類という立場を認識しながら、地球意識とコラボレーションしていく必要があるのです。地球を感じ取り、そして何を求めているのかを汲み取り、私たちが手を結んで未来を創っていく世界に到達するのが心磨きだと思うのです。

心を磨くということは、眼には見えない魂を磨くことです。その濁りはエゴです。それを取り去っていくことによって、個に偏った意識を離れて全体性を身につけていくのです。しかし、そこではエゴがなくなるわけではありません。地球という我の側に立つことで、私たち個人のカルマの表現は地球のカルマの表現になるのです。その世界は、創るものでも獲得するものでも改革するものでもありません。それこそ太陽が昇るように自然なものです。月から地球が出てくる「地球出」を観るように、私たちは新しい世界を迎えることができることになるのです。

一時人間たちにとっては技術革新を求め、物理的科学的にすべてを解釈することが真理であり追究してきました。しかし、イメージこそがこの世界を創っていて、それこそがこの世界をつないでいくものだと私は確信しています。物理的な人間の脳と物理的な人間の肉体で宇宙を解明出来るとは思いませんが、精神性や霊性によって人間は宇宙全体をつかむことが出来るのだと思っています。そういうものの捉え方をすると、理想の世界が訪れるのです。それが芸術のような自然の表現です。その時に、社会の中の経済や政治のあり方にも、自然の持っている世界観や自然観が反映された世界が出来てくるのです。

過去には、優れた人たちがこの世界の仕組みを考えてリードしてきました。政治家や宗教家、経済的に力を持っている優れた人たちが世界をリードしてきた時代から、ひとりひとりが主演の時代が来ようとしています。一時は引きこもりになったり、うつ病になってまでこの世界にメッセージを送っていた人たちが、そういったネガティブ的な現象をポジティブな理解で社会に貢献していくような社会が来ようとしています。では、私たちが人々に何を提案出来るのかといたら、そういった自由な発想や表現の仕方を伝えていく場所を提供することが出来ます。それと同時に、この20世紀型の価値観で傷ついてしまった人たちを癒してあげる場所をこれから提供していくことが大切です。そうすると、誰かが導かなくても、自然に地球の歴史として人々が変化し、この世界が創造されるだろうと思います。

地球はワンネスという世界における運命共同体です。人類がそれを認識していないだけなのです。私たちのような生き方は特殊なように見られていますが、実は地球が共同体なわけですから、共同体を創るというよりも、すでに私たちは共同体で生きているということに気づいていけばいいのです。地球はひとつの村ですし、地球がひとつの宇宙船です。私たちはそれを構成する村人であり、地球そのものがひとつの命の表現なわけです。そうすると、私たち人間はそのワンネスを表現するための多様性の中のひとつの細胞にしかすぎないのです。

私たちが考えている理想社会というのがすでにあるのですから、それに気づくだけでいいのです。それは、イエスキリストが人々に与えるためにパンを出したようなことと同じだと思います。気づいたら理想世界です。しかし、気づかなければ地獄です。対立し争い、自らの命を絶っていかないといけないような不幸な魂は、生きながらにして地獄を生きているようなものです。気づけばすでにワンネスの世界が実現しているのです。現実はこの多様性ある自然のハーモニーが奏でられているのです。そういう世界がすでにあります。私たちはもうそろそろ何かを獲得するとか、改革するとか、自分に不足しているから何かをほしいという概念を超えて、この世界に委ねていく時代が来ています。委ねていく時には信じる必要があります。心のゆりかごのようなものに自らを委ねていくこと。それは地上にあるゆりかごではなく、空中に浮いていてそこに飛び込んでいくような、そういう意識になれば、ワンネスの世界が実現してきます。

エリー：

4月の時点よりも大分頭がまわるようになってきたので（笑）、いさどんの話が以前よりも自分の中に入ってくる感じがしています。また言葉のレベルに戻るのですが。。

いさどん：

今、宇宙空間に行っていましたからね（笑）。浮かんでいて地上に立っていませんでしたから。

エリー：

私も一緒に浮かばせていただいていたのですが（笑）、これをまた地上に戻して言葉のレベルに戻させていただきますと、地球の意志が個人の中で受け止められ、メッセージとして理解し生きていくということはよくわかるのですが、社会意識と個人意識についてはまた違ったものだと思うのです。

いさどん：

同じですが、例えば素粒子レベル、原子レベル、細胞レベル、各機能レベル、そしてこの全体の個人としての生命というふうに観ていった時に、素粒子レベルでこの右手の機能をどうしようかと考えると限りなく遠い世界になってしまいます。個人が自分という存在を観た時に、この国家をどうしたらいいのかとか、人類の行く末をどうしたらいいのかと考えたら、限りなく遠いものになってしまうものです。人間には個人を意識するということを与えられてしまいましたが故に、個人を意識すればするほど、自分がその全体を構成しているにも関わらず、距離の遠いものを排除してしまうという意識を引き起こしているのです。私は日頃から宇宙を意識していますが、現実には民主党がどのようにこの国を導いていくのか、食糧問題をどうしたらいいのか、中国との関係をどうしたらいいのか、日米のパートナーシップをどうするのかと考えた時に、こういったことは個人には全く縁のないことのように感じられるものです。それが今の閉塞感を生んでいるのです。個人は常に全体に対して無力なものにな

っているということです。しかし、個がそのことを意識して自分がもっと大きなものを構成しているのだ、と気づいていくことも心磨きのひとつです。そうすると、遠いものではなくなるのです。たしかにこの国の政権を取るにはどうしたらいいのかと個人が考えて、今から人に呼びかけて政党をつくってこの国の政権を取るというのはすごく遠い話です。しかし、間違いないのはこの国は民主主義の国ですから、選挙権というものがあり、それを表現してくれる人を選ぶ一票を入れると、塵も積もって政権をつくっていくわけです。ですから、個が目覚めて個を磨かないといけないということです。そのムーブメント、100匹の猿現象をひとりひとりが意識し、みんなで手をつないでいくところから始まるのです。「自分がこの世界を創っているのだ。自分が地球すら構成しているのだ」ということにひとりひとりが気づいていく、そのムーブメントを私たちは起こしているのです。

個人が社会を観て、社会制度に対してここが問題だから変えていこうという考え方が20世紀型の変化の仕方でした。これからも制度的に変わっていくのですが、同時にこれからは人々の心の中にもそのムーブメントが起きながら変わっていく世界になるでしょう。そのような両輪が必要な時代なのです。今まではどちらかと言うと片輪でしたから、哲学や宗教の世界の中で微妙に語られていたり、神様という存在から宇宙をひとつの意識体として語られてきました。今木の花でも憲章を作っていますが、一般と木の花の違いは何かというと、一般では仕事と生活が別々であり、宗教観、自然観と個人の生活意識が別々のものなのですが、それが全部一緒になって両方のコラボのもとに生きているというのがこのあり方です。自然はすべてつながってひとつの生命をつくっています。その自然の仕組みに還っていくことがこの考え方です。そして、それは獲得するものではなく、それこそ太陽が昇るように自然に起きてくるのです。人間の歴史は地球の歴史であり宇宙の歴史であり、そして、宇宙があって地球があって人類があるわけですから、人間のための社会と考えること自体が本来はナンセンスだと思うのです。そこに意識がシフトしていくことが心磨きの目的であり、それこそが人間というものを本当の意味で進化させ成長させるということだと思います。

エリー：

私がなぜそういう質問をしたかということ、今まで私は例えば本屋に行って社会科学や宗教学の本を学ぶことを通して、今の社会が自分に何を期待しているのか、今の社会の構造がどのようになっているのかということを知り、社会意識というものを自分の意識と合わせながら自分の意識を変えてきました。つまり、私にとって社会意識というのは本の中にあっただけです。

いさどん：

本の中にあるというのは、実社会を観て本が書かれたのですから、つまりは実社会の中にあるということですね。

エリー：

ですから、実社会に出てその中で仕事をすることによって自分の意識と照合せながら、社会意識を羅針盤のようにして自分というものをつくってきたのですが、私の場合片手落ちとすることにもなりますよね。

いさどん：

人類そのものがこのところそうだったのではないのでしょうか。過去には自然とのコラボレーションがあったわけです。私たち人間は生かされているわけですから。過去に人間にはこれほど自然を変える力もなかったわけですし、自然をコントロール出来なかったわけです。しかし、この宇宙や地球の歴史の中ではほんの短い期間ですが、人類はそれをコントロールしようとしてきました。しかし、それすらも地球の歴史なのだという認識にもう一度戻っていくためにその期間があったと捉えたらどうでしょうか？

先程から同じことを繰り返し述べていますが、社会を構成しているのはひとりひとりの人間です。その中にある想いや欲求が社会を創っているのです。出発点はそこにあるのです。それはマクロ的に捉えると人間が何を考えて何を求めるかによって、社会の対立にも調和にも反映しているわけです。と同時にこれ自体は歴史の中で起きたわけですから、地球の表現とも言えるわけです。さらに、この宇宙全体があってその中にある地球の表現ですから、宇宙の意志でもあるわけです。それが認識出来た時に、人間は特定の存在から解放され自由が得られるのではないのでしょうか。つまり、個という狭い認識の中から観ていた世界観から、この巨大な宇宙世界を存在させている大きな存在である自分に目覚めていくのです。素粒子レベル、原子レベル、細胞レベルの集合体が自分を創っているというミクロな世界まで私たちは知ることが出来る時代に来ています。その姿は私たち人間と地球、宇宙との関係と同じです。その認識によって自分が生きているのか生かされているのかが観えてきます。

永遠で無限なる生命の連鎖を部分的に区切ると、自分と区切ったり家族と区切ったり社会と区切ったり国家と区切ったり、人類と区切ったり地球と区切ったりと無限なる自分の存在がそこにはいるわけです。それをイデオロギーや経済の革命のようにして社会を変えてきたのは、20世紀型の変革の取り組みでした。大学でもそういった取り組みがされてきたと思うのです。それが企業に伝わり、企業を構成する人々に伝わり、それから家庭生活ではテレビやパソコンを通じて、マインドコントロールのように人々にその価値観が伝わり、また元に戻っていく仕組みになっており、人々を狭い世界に閉じ込めてきたわけです。ほとんどの人々は朝同じように起きて、アスファルトの上を鉄の乗り物に乗って、コンクリートの中で競争をしながら、イライラガツガツして生きてきたわけです。

この対談はもともとうつ病の本を出版するためのものですが、うつ病を治すことよりも、なぜうつ病が発生しているのかということに気づき、発生しない仕組みを選択していけば、自動的にうつ病が起きない世界が出来るのです。うつ病の本から政治も経済も医療も福祉も解決出来るはずですが、ただ、一気にすべてを解決することは難しいですから、私たちは主に人

間関係の問題から取り組んでいます。科学というのはものをわかりやすく捉えますが、区切ってしまうから全体像が観えなくなってしまうこともあります。ですから、ホリスティックとサイエンスを同時に理解し世界を観ていく必要があります。現在そうですし、そういう認識のもとに生きていくということが大切です。物理科学の世界が宗教、神の存在を立証する時代になると思います。

エリー：

話は少し脱線するかもしれませんが、先日いさおちゃんのお母様にお会いしてひとつ思い出したことがあるのです。お母様もカトリックでいらっしゃるのですがその話の中で、「カトリックには普遍という意味がある」と急に思い出したのです。教義や宗派の色々な争いや宗教戦争をすべて無視したとしてカトリックの成り立ちを考えたならば、カトリックはもともと普遍であって、それをキリスト教と呼ぼうが何と呼ぼうが、そこで話されていることが普遍だとしたならば、宗教の主義主張を超えてただ普遍であることをバチカンが証明しようとしていると思ったのです。そうすると、カトリックで言おうとしていることを捻じ曲げている人は沢山いるのですが、その本質というのは私自身が捨て去らなくてもいいものがもともとあったのではないかという気がしたのです。

いさどん：

まったくその通りです。それはエリーの中にある真理を求める心から湧き出てくるものだと思うのです。カトリックという言葉が普遍だとしたら、大体カトリックという教団があること自体がおかしいのです。万教同根という考えが大本教にあるのですが、すべてのものはひとつの根から出ているのですから、それを何何教と名乗っていること自体がおかしな話です。しかし、そういうふうに区切って対立し、違いを比べていくことによって、逆にこの世界の多様性を知ることにもなります。多様性にフォーカスしすぎると今のような世界が出来るのだという学びになり、大きな捉え方をすればそれはひとつの表現なのだという事です。そこに至るプロセスとして、カトリックもイスラムも仏教もヒンズー教もあったと考えれば、カトリックの本山であるバチカンでそれを考えていてもまったく不思議ではありません。では、なぜ人々にその精神性が行き渡らないのかといたら、もう一度先程の話に戻りますが、個々の人間が我というものをいただいて、そこから学んでいきなさいという過程の中で必要だったことだと思うのです。だから、信者さんがその教えに従順であればあるほど、その組織には排他的なのです。つまり、本来の教えにそぐわないような人になることがその組織では素晴らしい信者である、という矛盾が発生するのです。

エリー：

私は高校を卒業する時にマ・スール（シスター）たちと大げんかしまして（笑）、その時に考えたのは宗教というのはどの道を取っても目的は一緒なのだという事です。だから、何

もキリスト教でなくてもいいのではないかと思います。

いさどん：

逆に言うと、その「道」は全体の中で発生しているのですから、それも全体でひとつなのです。このひとつの中で道が発生しているだけで、狭い一点へ目的を持っているということも言えますが、結局この巨大な世界を理解するところに進んでいるのです。内と外の両方に向かって探究しているのです。今まではそれがどちらかになってしまっていたということです。ですから、私はエリーがカトリックであり続けていいと思います。しかし、カトリックの信者はやめてもいいと思います。

エリー：

はい（笑）。私は高校の時にマ・スール（シスター）たちに決裂状を投げましたから（笑）。

いさどん：

多くの人たちは、真理のもとにいたはずなのに真理から離れてしまっています。そういう人たちが沢山いるのです。しかし、エリーやいさおちゃんには真理を求める心があったから、ここに来たのだらうと思うのです。ここでまた間違いを犯してはいけないのは、木の花に来て「これだ」と思って、木の花の思想として広げていくと、また木の花教が起きて同じ現象になるのです。ですから私がよく言うのは、「これは私が話すからいさどんの哲学とか、木の花で語られているから木の花イズムということではありません」ということです。誰もがこの世界の中にいて、それを認識するだけでいいのです。全体を認識することによって、「すでに真理のもとに私たちはいる」というだけのことなのです。そうすると、今までのような宗教はいりません。あえて言うならば、この何とも表現しようのない、名前もつけようのないこの宇宙の中にいる私たちということ。この宇宙に名前はつけられませぬし、この巨大なものを特定することも出来ませぬ。今日はエリーがカトリック教会の呪縛から解放される日です（笑）。

エリー：

「カトリックは普遍だ」という意識ですから、カトリック教会から解放されたのではなくて。。。

いさどん：

その普遍がカトリックだとしたら、普遍の中に解放される日でもあるわけです。本当のカトリックになるということですね。

エリー：

そうですね。いさおちゃんのお母様とお話ししている時にすごくありがたいこととお話ししてくださっているのに、私はこのことを考えていました（笑）。

いさどん：

いさおちゃんのお母さんは心が病むくらい熱心に探究しているのです。しかし、あの人は息子が木の花に来ることを許した人です。それはカトリックの信者さんからしたらあるまじきことです。それこそ異端をつくるようなものですからね。それを認めるという心があるということは、本物のカトリックになる要素があるということで、エリーと話が合ったわけですね。

エリー：

でも、「成人してから信者になったから」とすごく神を恐れる気持ちが強いようですね。私は生後 1 ヶ月で信者になって自分に全然責任がないと思っていますから、神様を恐れていないのです。

いさどん：

神様はお友達であり自分自身でもあるのですよ。

エリー：

そうですね。だから、「同じ宗教でも全然違うのですね」と話していました。

いさどん：

信者というものは、教祖があって信者がいるわけです。そうすると、この世界が多様性でありながら、真理と真理でない側、正義と悪を分ける世界なのです。それはこの世界を存在させる両輪のようなものであり、分けて違いを対立させるものではないのです。ですから、教授と学生、医者と患者、教祖と信者と分けるのではなく、そのどれもがこの世界を構成しているものとして存在しているのがこの世界なのです。そうすると、宗教に属している人たちは、もうそろそろ信者でなくなるということです。つまり、ひとりひとりが教祖であるということです。「貴きものを見つけてそこに行き救われることよりも、自らが貴きものとなって他を救えるようなものとなれ。これからはひとりひとりがイエスやブッダであるぞ」ということです。ひとりひとりの中に真理があり、宇宙の仕組み、いのちが脈々と流れていて、その真理は自分の中から湧き出してくる。それを邪魔しているのは「自分が」というエゴの濁りです。それが己を垢のようにして囲み、光を外に出さないようにさせているのです。だから、自分磨きをすることが大切なのです。そうすれば、真理は他者から来なくても、ひとりひとりが宇宙の発信源ですから、どこからでも真理が生まれるようになっていきます。この考え方では、あなた自身が真理のもとになれるということです。誰もがここを担っている代表なのだということです。その心に目覚めたら革命はいりません。それこそ昇る朝日や沈む夕日を観るように、宇宙空間から昇る地球を観るように、止まることなく粛々となっていくことなのです。

いさおちゃんのお母さんがカトリックという概念を持っていても、私たちはもっと近くなれると思います。あの方も今後のことを考えると、今のライフスタイルのままでいいのか、次の生き方を模索していると思うのです。

エリー：

私もよくわかるのです。決して贅沢なお家ではなくて、本当に清いお家なのですが、各部屋にキリストの肖像があって十字架があるのです。

いさどん：

ある宗教の信者さんにとっては、「ひとりひとりがキリストだ」と言ったらえらいことになりませんが、実際にキリストというのは人間ではないんですよ。キリスト神という精神性なのです。イエスがキリスト神になったのです。つまり、この宇宙の魂を表現することがキリスト神なのです。

エリー：

復活という意味がありますよね。

いさどん：

そうです。今ここにキリストが復活しています。それは誰の中にもあるものです。

エリー：

そういうふうに、今キリスト教の教義が復活していることを根幹としているのなら、イエスがキリスト神であることを理解出来る人はいると思います。

いさどん：

ですから、ブッダも生き続けていると思うのです。ブッダの経典、それこそ法華経の経典は聖書に匹敵するくらいの大作です。あれはお釈迦様が亡くなってから500年後に編纂されたものであり、お釈迦様が直接作ったわけではないのです。しかし、ではブッダの教えではないのかといたら、私はブッダの教えだと思います。ブッダの肉体は滅んでも、魂は人々の中に生き続けているのです。そして、いのちというものは変化し成長し続けるものです。循環し巡り巡って、ブッダやキリストの精神すら成長し続けるものなのです。ですから、キリストやブッダ、ムハンマドが残したものがこれからさらに進化してこの世界に表現されてくだろうと思っています。それこそキリストを超える世界が表現されるだろうと思っています。そうでないとおかしいですよ。この人たちが最高で、そしてそれを持って頂点としたならば、人間はいつもその下にいないといけなくなってしまいます。しかし、それを解放してやったらそこをも超えて、キリストからバトンを受けて次の世界を生むことが出来るのです。そこで神様は精神性の進化を止めたわけではないのです。この無限で永遠なる学びを続けるために、人間にバトンを渡したただけなのです。ですから、私たちもそのことに気づきバトン

をもらって次に渡さないといけないのです。そのために魂の解放、宗教の解放があるのです。

エリー；

今日は本当に良いお話を聞いて良かったです！

いさどん：

いさおちゃんのお母さんともまたお話ししたいですね。結局私が話をすると、その人の概念を崩してしまうことになるのです。やわらかい人はそれで喜ぶのですが、固い人は自分になくなってしまいうように感じてしまいます。固さがなくなってやわらかい新しい人になれる、ということに気づいてくれればいいのですが。しかし、固くてもいいのです。固い状態でもその固い殻があるということに気づいたら、多様性のひとつになって、そのこと自体がやわらかいことにもなるのです。だから、固くてもいいのです。それは芯があるということですから。ただそのことに気づけばいいのです。

エリー：

ですから、恐れなくていいということですよ。

いさどん：

そうです。恐れは必要ありません。それが宗教という組織の問題です。組織という枠を創ると枠の中に閉じ込めることになってしまっ、それから外れてしまうことの恐れを説くわけです。しかし、外れていいのです。これほど多様性の世界では、枠をつくったら外れることだらけですからね（笑）。外れるということも真理の中にあるのです。